

コロナ禍におけるジオツーリズム・教育旅行の取り組み



下村 圭*1*2 荒井 康輔*1*2 菅谷 琴乃*1*2 植家 祐慈*1*3 松原 凪沙*1*3

*1 三笠ジオパーク推進協議会事務局 *2 三笠市役所経済建設部商工観光課地域開発・ジオパーク推進係 *3 三笠市地域おこし協力隊

はじめに

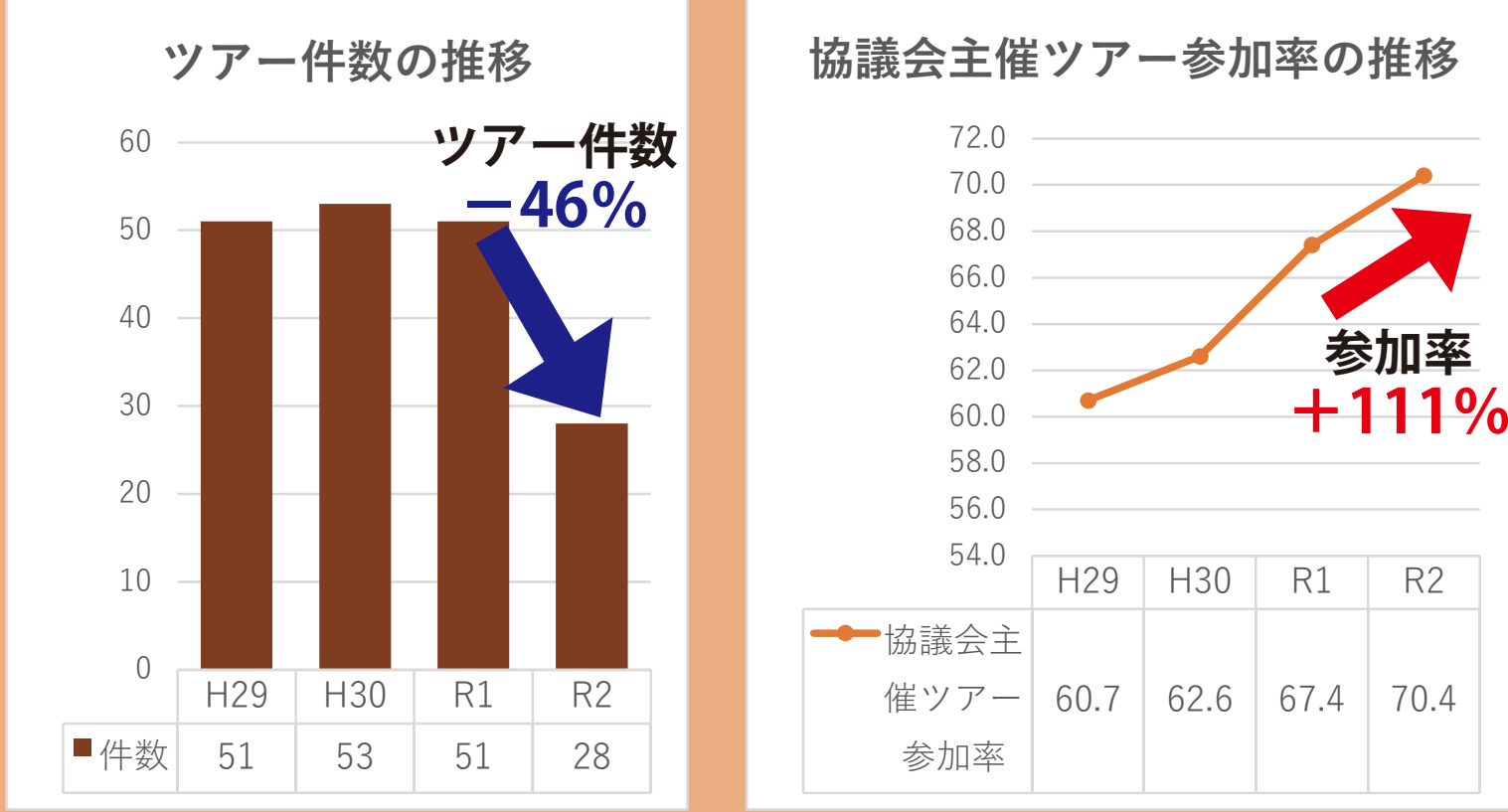
三笠ジオパークでは、2013年に日本ジオパークネットワーク（JGN）に加盟後、積極的なジオツーリズムに取り組んでおり、様々なジオツアーの受け入れを行ってきた。三笠ジオパークの特徴である石炭や化石の地質的部分、炭鉱遺産など北海道開拓との関わりがある歴史的な部分を知ってもらうほか、ラフティングやツリーイングなどアクティビティメニューの幅も広がり、集客は年々増加傾向にある。しかし、今般の新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」）の拡大により、年度当初予定していたジオツアーや教育旅行について、日程や内容の変更を余儀なくされる事態が発生した。

このようなコロナ禍の状況においても、三笠ジオパークでは令和2年度のジオツアー参加率及び教育旅行受け入れ数が増加し、教育旅行に関しては過去最高の受け入れ数となった。この背景に、主要要因として「感染対策の徹底」「屋外フィールドを中心とした三密回避」「札幌等都市圏からの人の流れ」の3点が考えられる。本発表では、この3点について分析を行い、三笠ジオパークとして with / after コロナの向き合い方について考察する。

ジオツアー、教育旅行の現状について (R2年度～)

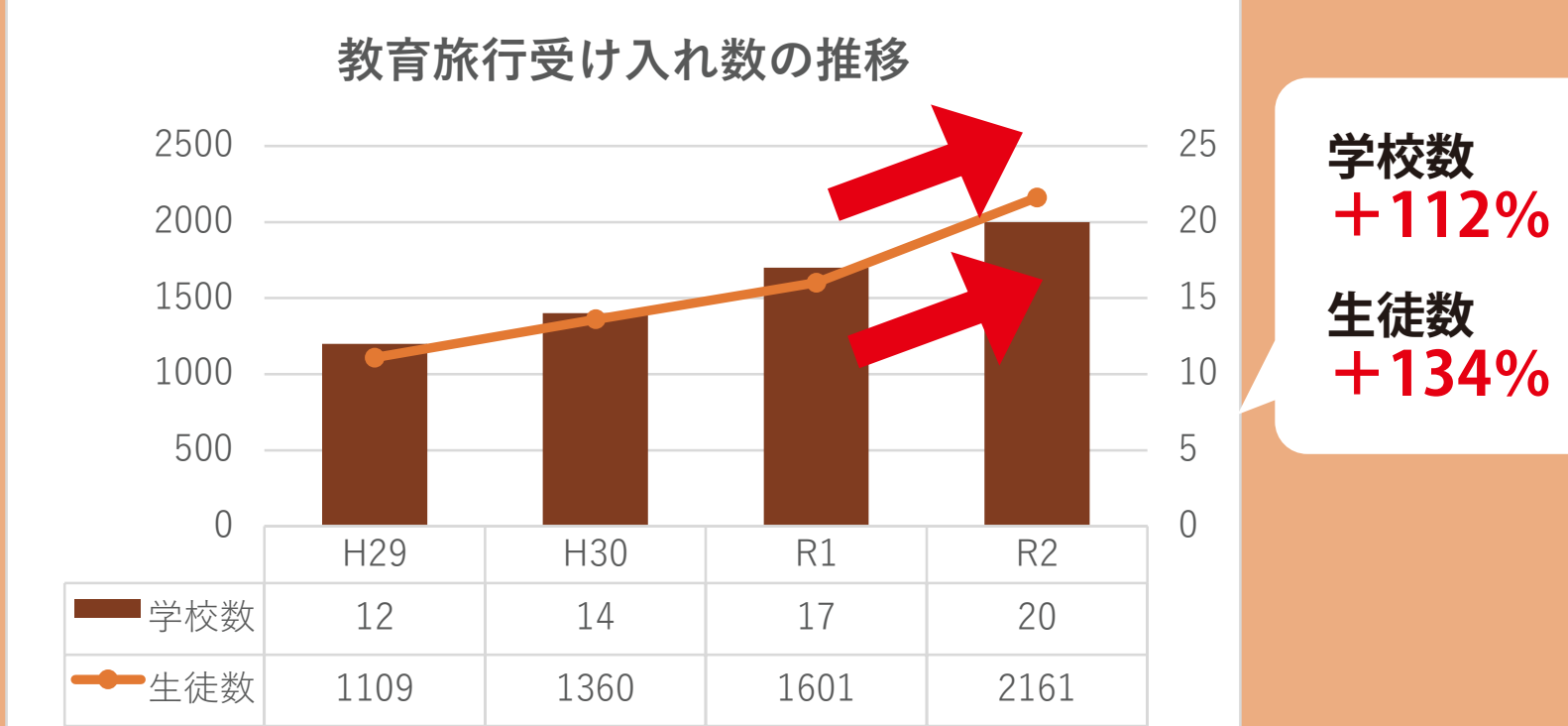
過去4年のデータを比較すると、ツアーの件数が、令和2年度は例年の半数以下の実施回数となった。また、夏季に実施する集客の主軸となる対面でのガイド付きツアーの機会が減少したことに加え、個人・団体申込のツアー数が8件のみとなった。

そのなかで、協議会主催ジオツアーの定員に対する参加申し込みを示す参加率は、令和2年度に過去4年間で最も高い数値を記録した。このことより、ツアー等の一般向けツーリズムの機会が減少した中においても、参加申し込み数が増加し、かつそれらのツアー等を催行することができた、といえる。



三笠ジオパークでは平成26年度に教育旅行の受け入れを開始し、年々生徒数・学校数ともに増加傾向にある。コロナ禍となった令和2年度においても、受け入れ生徒数が2161人、学校数が20校と、過去最多の受け入れを行った。また、学校数の増加率と比べ生徒数の増加率が20%以上高いことから、ひと学年の人数が多い学校（以下「大規模校」）を受け入れている。

これらのことは、コロナの拡大期間が延長し続ける中で、より多くの教育機会の提供とジオツーリズムの実施を可能にしている、といえる。



要因① 感染対策の徹底

ジオツアーや教育旅行を実施する際、最も重要になるのがコロナ対策であり、三笠ジオパークでは、事務局員が北海道医療大学 塚本容子教授によるオンライン講習を受講し、専門家からコロナ対策の正しい知識や最新情報などを習得している。

その知識を活かしジオツアーや教育旅行などで忠実にコロナ対策を行っている。



- (例) 屋内に入る際の消毒
- ガイド中のソーシャルディスタンス
- 昼食会場の分散・黙食
- 屋内サーキュレーターによる空気循環・換気



サーキュレーターの設置

また、イベント時のワークショップ体験での工夫として、席の間隔をあけてアクリル板を設置し、共有物をなくするために材料を小分けにして個包装に変更した。さらに時間制にすることで、1回あたりの体験者数も限定し、十分な消毒時間を設けることもでき、対策の可視化につながった。



改良前

- 対面ワークショップ
- 共有物が多い
- 参加者同士が密接になる



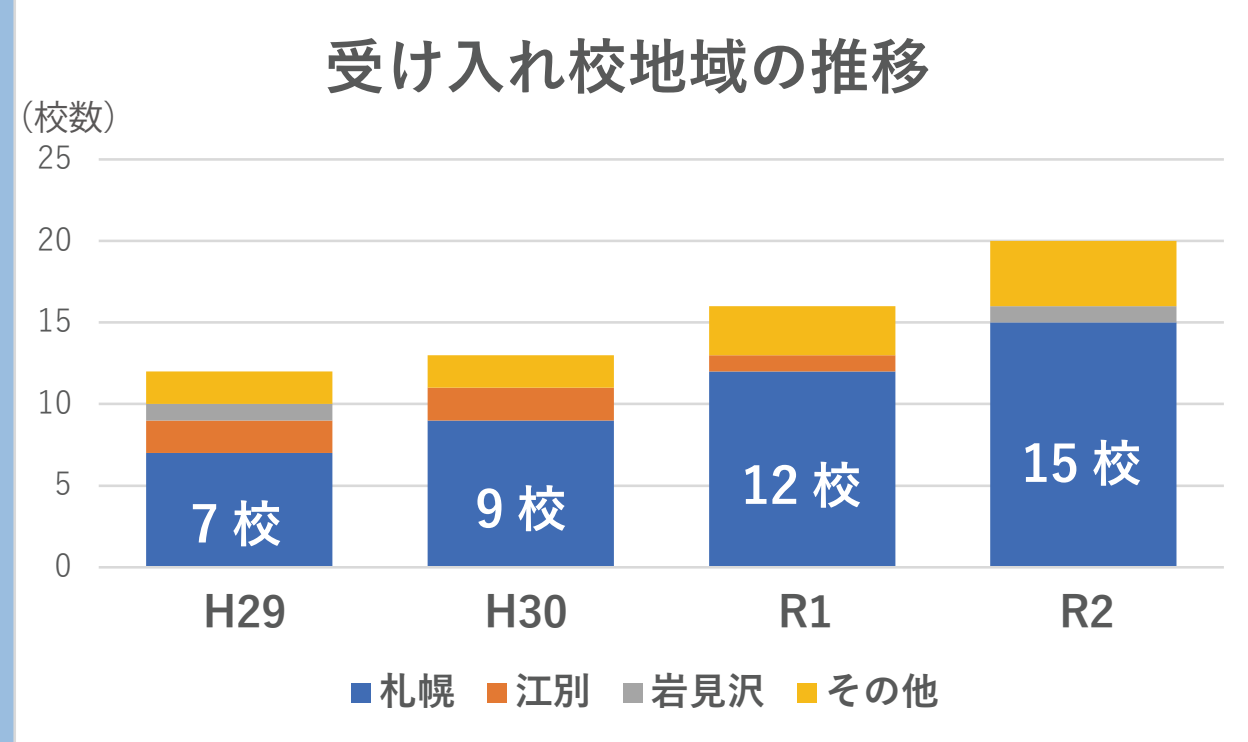
改良後

- 非対面ワークショップ
- 材料を個包装にする
- 参加者接触を減らす

要因③ 札幌等都市圏からの人の流れの変化

札幌圏の学校が教育旅行を行う場合、車で2時間程度に位置する旭川市や富良野市を宿泊地とし、それらの中間に位置する三笠市が地層や歴史などを学習できる研修先として利用されることが多く、令和2年度も例年に引き続き生徒数、学校数ともに増加傾向にあった。

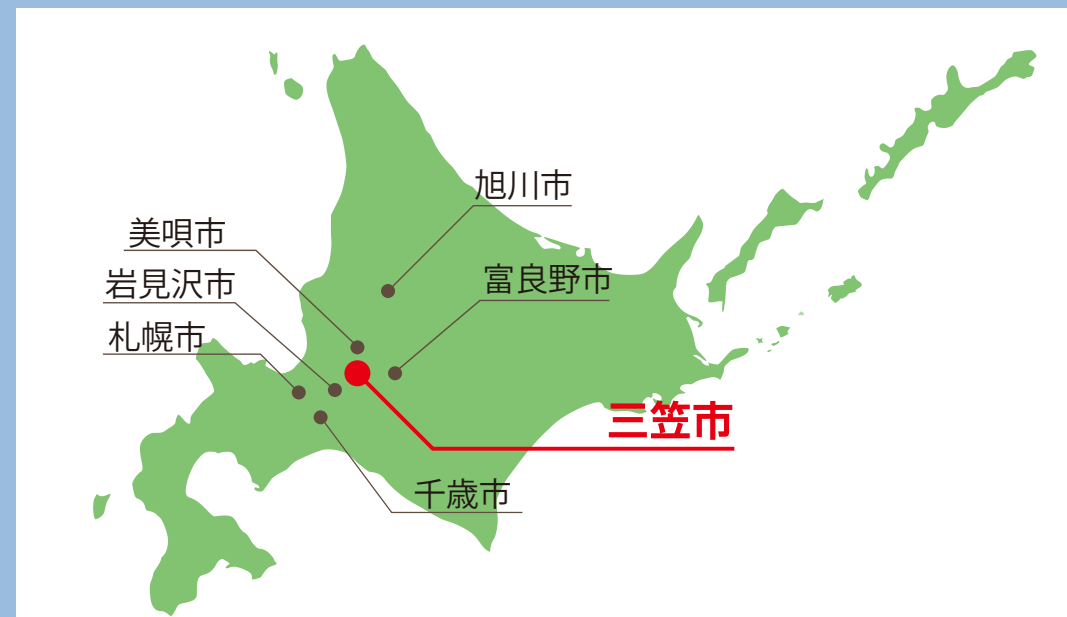
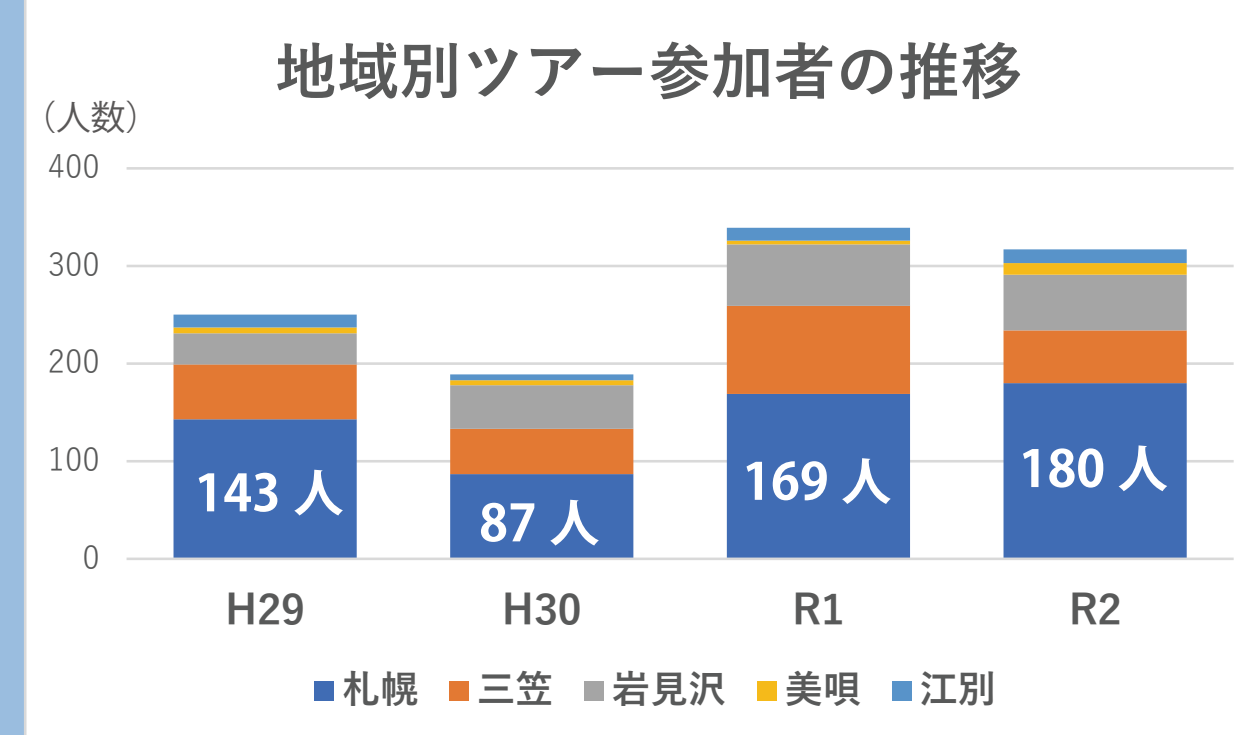
- ※1 グラフでは教育旅行受け入れ学校数の多い上位3地域とその他地域として記載
- ※2 白字は札幌市より来訪した学校数



コロナ禍においては、とりわけ人口の集中する札幌圏において、まん延防止等重点措置や緊急事態宣言が発令されることによりイベントの中止・延期が発生した。

こうした背景から、遠方への旅行を取りやめた学校や一般旅行者が、感染対策が徹底され、屋外を主なフィールドとし、アクセスの良い三笠ジオパークを訪問先に選んだものと考えられる。

- ※1 グラフでは協議会主催ツアー参加者の居住地域の主要部を占める上位5地域のみ記載
- ※2 白字は札幌市より来訪した参加者の人数



要因② 屋外フィールドを中心とした三密回避

三笠ジオパークでは、ジオサイトや見どころが基本的に屋外となっていること、行程を分散させることにより三密を回避しながら実施している。

例えば、ひと学年100人以上の学校を受け入れる場合、クラスごとで行程を分け、クラス内でも班分けをした上で屋内外施設の見学を行い、さらに昼食会場も時間・場所・人数を分散することで三密を回避できる。

その結果、学校や旅行会社からの需要が高まり、コロナ禍においても大規模校などの受け入れを可能にしたことで教育旅行の受け入れ数増加につながった。

(例) 実際に行った行程の工夫による分散化

時間	集合	10時	11時	12時	13時	14時
班編成	A行程 31名 1組	バス	バス	バス	徒歩	徒歩
		別炭	鉄道記念館	博物館	博物館2階	野外博物館
		博物館	野外博物館	博物館2階	鉄道記念館	別炭
		野外博物館	鉄道記念館	博物館	別炭	博物館
B行程 29名 2組	バス	バス	バス	バス	バス	バス
	別炭	鉄道記念館	博物館	博物館2階	野外博物館	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館
C行程 27名 3組	バス	バス	バス	バス	バス	バス
	別炭	鉄道記念館	博物館	博物館2階	野外博物館	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館
D行程 29名 4組	バス	バス	バス	バス	バス	バス
	別炭	鉄道記念館	博物館	博物館2階	野外博物館	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館
	野外博物館	鉄道記念館	博物館	博物館2階	別炭	博物館

※屋外施設…別炭（ぼんべつ）炭鉱、野外博物館
屋内施設…三笠市立博物館、三笠鉄道記念館
※昼食会場は三笠市立博物館、三笠鉄道記念館、ジオ-Iku(三笠ジオパーク 所有施設)の3か所に分散

- 開放的な空間での見学とガイド解説、換気の徹底 → 「密閉」の回避
- 見学時のソーシャルディスタンスの確保・呼びかけ → 「密集」の回避
- 距離をかけた座席配置、共同作業の縮小 → 「密接」の回避



また、ガイドへのコロナ対策の理解に努め、情報共有しながら協力を図っている。解説中にはマスクの着用、飛沫感染を防止するため少人数であってもマイクの着用を義務付けた。ガイドを行う際は、参加者を少人数に分け、解説中に使用する小道具は参加者に接触させないことを徹底している。



現状の課題

現在、コロナの終息に目処が立たない状況においてツアーや教育旅行の対応をするにあたり、事務局側（主催側）が常に感染の危機に晒されている。そのため、現状の課題として、今後も最新の情報に基づいたコロナ対策のアップデートを図っていく必要がある。

また、コロナの長期化に対応可能なオンラインを活用したコンテンツとして、博物館等の内部をオンラインで見学できるマナーポートの撮影や、野外博物館等の屋外施設を見学できる360度画像撮影を行ってきた。しかし、オンラインツアーの実施には至っていないが、教育旅行やイベント時に大人数でも利用できるコンテンツ化にはつながっていない。

オンライン事例(一部)

三笠市立博物館の内部、野外博物館をオンラインで見学できるマナーポート(360度画像)



三笠市立博物館のマナーポートデータを活用したオンラインツアー



新種のアンモナイトを活用した3Dデータ



今後の展望

今後もコロナ対策の最新情報を入手しつつ、感染リスクを回避しながらジオツーリズムを進めていく必要がある。専門家との協力体制を維持しつつ、最新の情報に基づいた感染対策の可視化を基盤に、参加者および関係者との積極的なコミュニケーションを通して、「安全」と「安心」を伝えていけるよう努めていく。このような取り組みを継続することで、ジオツアーの参加者を増やし、教育旅行の新規エリア受け入れにつなげていきたい。

また、コロナ禍によりアウトドア需要が高まっていることから、令和3年度より積極的に取り組んでいる、フットパスツアーや森林をフィールドとした屋外コンテンツ拡充のほか、教育旅行やイベント時に大人数でも利用できるオンラインコンテンツの造成を続けていきたい。三笠ジオパークとして、with / after コロナ時代に適応したコロナ対策を推進していく。